戯れ言の自由

詩：平田俊子
音楽：高橋悠治

long 長　short 短　// caesura 中断

1）落下

1

non misurato

Voice

戯れ言の自由

Piano

ineguale

Pno.

落下

2

parlando

洗面所で　かすかな 音がした　それほど　大切でない ものが　落ちた　ような 音だった

Pno.

Pno.

見 にいく　と　きちん と　二つ　折に　して 掛けた はずの　タオル　が

Pno.

くたり　と　床に　落ちて　いた

Pno.

3
落ちる はずの ない ものが 落ち て しまう
Pno.
senza Ped.
それは 不思議な こと なのか ありがちの こと なのか 離れて 暮らす 家 族の 安 否が 気になっ た
Pno.
Pno.
4
巣 から落ち た ヒ ナ の よう に 床の上のタオル は 無 力 で 生々し い
Pno.
asincrono
誰 か が 拾い上げない 限り タオルは タ オルの 役目 を 離 れ 落下 物 と して
Pno.

そこに　あり続ける
Pno.
5
駅　の ホーム
から 飛び 降りるタ　オル
Pno.
高い ビル から
飛び　降りる　タ　オル
Pno.
タ　オルより　軽　やかに
どこまでも　落ち　てゆく
人間という　タ オル
Pno.
Pno.

2) 寒い朝

6
Voice
寒い朝
Piano
7
parlando
豆　を挽いて
Pno.
お湯を 少しずつ そそ ぎ
Pno.
ineguale
コーヒー を 二 杯 淹れ る
一 杯は 自分の ため
Pno.
asincrono
もう 一 杯は ここに いない 人 の ため
Pno.

8
寒が り だったから
Pno.
マフラーを 巻いてあげれば よ かった
手 袋を 持たせて あげれば よ かった
Pno.
何 も ない まま いかせてしまった
悔恨の 炎で 沸かす のは 冷た すぎる水
Pno.
9
生に若しく
死 は 優しい そんなふうに思えば
救われるだろうか
Pno.
風の甘さや
光の
まぶし さに
気づかない ふり を して
Pno.

10
花 が咲いて
鳥が さえずり
Pno.
誰 か が いない
春
Pno.
感情のかけらが
ひとりごとになって
Pno.
いくら でも
こぼれ 落ちる
Pno.
Pno.

11
お 湯は いつでも 沸かして おこう よ
Pno.
寒い 人を暖められる よう
す ぐに コーヒー を 淹れられるよう
Pno.
誰も帰ってこない 日 も
Pno.

3） ゆれるな

12
Voice
ゆれるな
Piano
ineguale
Pno.
13
parlando
ゆれる ね
Pno.
asincrono
きょう も ゆれてる ね
Pno.
地球 が 荒 ぶる ゆりかご だった とは
知らな かった よ
Pno.

おとなも　子どもも　眠　られない　意地悪な　ゆり　かこ　だったとは
Pno.
Pno.
14
三　月なんだよ　春　なんだよ
asin.
Pno.
春眠　暁を　覚えない　優しい　季節の　はずなのに
Pno.
今年の　春は　ひとを　ゆさぶり　眠らせまいと　する
asincrono
Pno.
Pno.

15
地球よ お前は い つ の 日 も
Pno.
愉 快 に まわる だけ で いい
Pno.
ゆれるのは風 に吹かれる 花 や 庭 の 洗濯 物 に まか せて
Pno.
お前は いつも 無 邪 気 に ま わ れ
asin.
Pno.
Pno.

16
地球を
ゆらすものは
泡　となって　消えろ
Pno.
ゆれるな
れるな
Pno.
る　な
な
な
Pno.
quasi gliss.
な！
Pno.
Pno.

4）cadenza

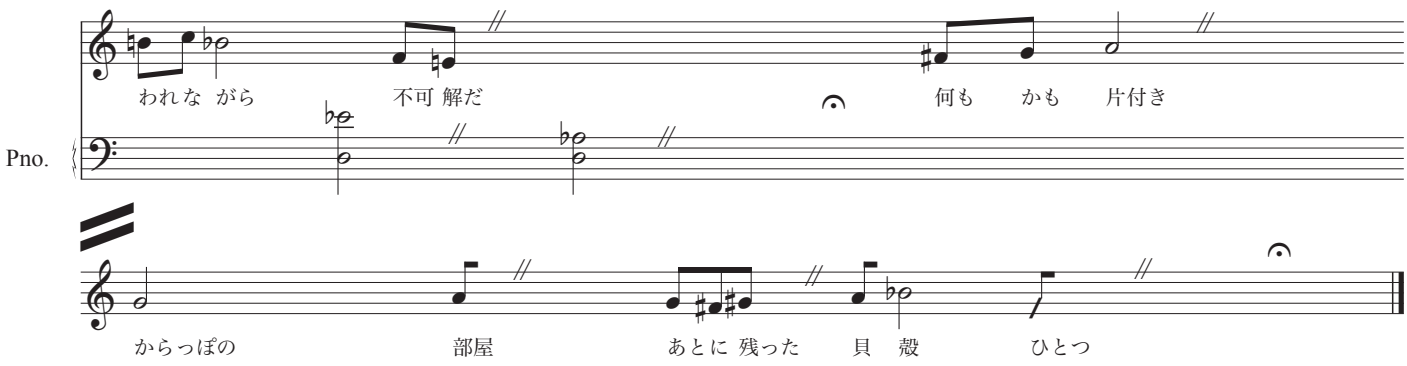
4）cadenza

5）貝殻

18
Voice
Piano
貝殻
19
今日 は お 日 柄 も よ く
Pno.
な き がら も 笑っ てや がら し がら み から 解放されて
Pno.
ほ がら か な 笑み 浮か べて や がら
Pno.
誰 かを 待ち な がら 死んで いったか 泣 き な がら だった のか
Pno.

ワタ リ ガラ スの俺 は 知らない ぬけ がら と なった 今
Pno.
いや がら せを する 人は ない 遅 れ ばせ な がら 駆け つける 人 も
Pno.
涙 な がら に 送 る ひとも なく なきがら は 燃え 殻 に な る
Pno.
がら くたの ように 生き た 日々 生まれ な がら の 独り ぼっちは
Pno.
ひとごと な がら さり な がら 涙らしきものが落ちるのは
Pno.

5）貝殻



平田俊子　『戯れ言の自由』より

落下

洗面所でかすかな音がした
それほど大切ではないものが
落ちたような音だった
見にいくと
きちんと
二つ折りにして掛けたはずのタオルが
くたりと床に落ちていた

落ちるはずのないものが
落ちてしまう
それは不思議なことなのか
ありがちなことなのか
離れて暮らす家族の安否が
気になった

巣から落ちたヒナのように
床の上のタオルは無力で
生々しい
誰かが拾い上げない限り
タオルはタオルの役目を離れ
落下物として
そこにあり続ける

駅のホームから飛び降りるタオル
高いビルから飛び降りるタオル
タオルよりも軽やかに
どこまでも落ちてゆく
人間というタオル

寒い朝

豆を挽いて
お湯を少しずつそそぎ
コーヒーを二杯淹れる
一杯は自分のため
もう一杯は　ここにいない人のため

寒がりだったから
マフラーを巻いてあげればよかった
手袋を持たせてあげればよかった
何もないままいかせてしまった
悔恨の炎で沸かすのは
冷たすぎる水

生は苦しく　死は優しい
そんなふうに思えば救われるだろうか
風の甘さや光のまぶしさに
気づかないふりをして

花が咲いて　鳥がさえずり
誰かがいない春
感情のかけらがひとりごとになって
いくらでもこぼれ落ちる

お湯はいつでも沸かしておこうよ
寒い人を暖められるよう
すぐにコーヒーを淹れられるよう
誰も帰ってこない日も

ゆれるな

ゆれるね
きょうもゆれてるね
地球が荒ぶるゆりかごだったとは
知らなかったよ
おとなも子どもも眠られない
意地悪なゆりかごだったとは

三月なんだよ　春なんだよ
春眠暁を覚えない
優しい季節のはずなのに
今年の春は
ひとをゆさぶり
眠らせまいとする

地球よ　お前は
いつの日も
愉快にまわるだけでいい
ゆれるのは
風に吹かれる花や
庭の洗濯物にまかせて
お前はいつも
無邪気にまわれ

地球をゆらすものは
泡となって消えろ
ゆれるな
れるな
るな
な
な
な！

貝殻

今日はお日柄もよく
なきがらも笑ってやがら
しがらみから解放されて
ほがらかな笑み
浮かべてやがら
誰かを待ちながら死んでいったか
泣きながらだったのか
ワタリガラスの俺は知らない
ぬけがらとなった今
いやがらせをする人はない
遅ればせながら駆けつける人も
涙ながらに送る人もなく
なきがらは燃え殻になる
がらくたのように生きた日々
生まれながらの独りぼっちは
ついに　がらんどうになる
ひとごとながら
さりながら
涙らしきものが落ちるのは
われながら不可解だ
何もかも片付き
からっぽの部屋
あとに残った貝殻ひとつ